

P-225

患者と配偶者の希望が乖離した事例

名古屋第一赤十字病院 看護科

おおば ゆみこ
大場裕美子、永井佑未子

【はじめに】終末期患者と配偶者（以下妻とする）の予後の過ごし方の希望が乖離した事例について、村田理論を用いて患者のスピリチュアルペインの構造を明らかにし、看護実践を評価した。尚、本研究はご遺族の承諾を得、個人が特定されないよう配慮した。

【1. 事例紹介】A氏（50代男性）。本人・妻に前立腺癌で予後不良と告知済。家族構成：妻と2人暮らしで犬を飼っている。最後の望みは犬に会うことである。

【2. 経過とスピリチュアルペインの分析、看護の評価】1) 告知を受けた時期時間存在が細くなったことを知りA氏は退院を望んだ。退院を自ら希望したことは、自律存在の柱が保たれていることを示していた。また、妻から生活面での支援はされており、関係存在の柱も保たれていた。2) 退院を望んだ時期A氏は退院と犬に会うことを望み続けたが、妻は外泊しか承諾できなかった。A氏自身も今回が最後の機会になると自覚していたようであるが、妻の思いも理解し、退院の実現が遅々として進まない状況を、半ば受け入れているようだった。第三者にはわかりえない夫婦間で築き上げてきた関係存在と自律存在の柱が保たれ、A氏はゆったりと構えているように見えた。3) 体調悪化の時期妻と医療者との話し合いから外泊の計画までこぎつけたが、直前になって妻の都合により延期となった。犬に会うという目標も実現できず、体調や日常生活動作の悪化などからA氏自身は時間存在の脆さを自覚し、ついには関係存在も徐々に細くなっていった。

【3. おわりに】A氏のスピリチュアルペインは、3つの柱の状態が心身の変化や妻の言動・行動、周囲の関わりや状況によって大きく変動していた。時間存在の柱は、破綻と再構築を余儀なくされ、関係・自律存在の柱に比して1番脆かった。安定したスピリチュアルケアには、関係・自律存在の柱を太くすることが重要であった。

P-227

患者指向のナースコールの対応について

小川赤十字病院 外科

ひろの みちこ
広野三智子、藤澤 紀子、久保田雅美

【1. はじめに】ナースコール（以後、NCと略す）は「入院患者が緊急時に看護師を呼ぶためのもの」である。しかし、現状は“どうしました”等、内容を聞き、病室に何度も行く手間を省いている事が多い。

今回アンケート調査を実施、実態を把握し、文献検索を行い、ケアの改善を図りたいと考える。

【2. 研究方法】1). 対象 病棟在籍中の看護師33名看護師の平均経験年数は約6.8年2). 調査方法平成23年1月11日～同月17日にアンケート調査を行い、現状を把握。文献から患者指向のNC対応を検索し、その後勉強会での統一化を図った。

【3. 倫理的配慮】本研究以外の目的では使用しない事、責任を持って保管・処分する事等を文書および口頭で説明、承諾を得た。

【4. ケアの実施】アンケート調査は、看護師33名に渡し、31名回収、93.9%の回収率であった。また、文献検索を行った結果、NC対応は迅速に行うことや、“伺います”と対応した方が望ましいと述べている。そのため伝達講習し、対応の統一を図った。

【5. 考察】牟田は、患者は看護師が息せき切って来てくれる事を期待して鳴らしており、患者指向の“伺います”の対応が望ましいと考える。

現在、“伺います”のNC対応に統一した事で、迅速な対応が図れ、患者満足度も向上したと考える。

【6. 結論】当病棟の構造上、各病室型であり、看護師指向の対応方法になっていた。

今回、実施前と比べ、迅速な対応がされていると私達は実感している。NC対応時、患者指向の返答に切り替えた事で迅速な病室で、患者満足度も向上したと思う。

今後は、NCゼロに向けてケアを実践したいと考える。引用文献1) 牟田邦彦：アンケート-トから見る改善したい病院設備，設備，vol. 49No.6 p.506-510, 2007

P-226

透析センターにおけるフットケアの現状と今後の課題

福井赤十字病院 腎臓・泌尿器・透析センター

まるおか まき
丸岡 真紀、飯田 陽子、高嶋 節子

【はじめに】透析センターでは、平成18年より透析患者のフットケアを行ってきた。徐々に観察シートの様式を変更し、平成19年から現在の色別シート様式になり継続している。その結果をまとめ今後の課題を明らかにしたので報告する。

【方法】1. リスク別（4段階 観察回数毎）に分け、足の観察を行なった

2. 外来血液透析患者に平成19年に行った足に対する意識アンケートと平成23年に同じ調査を行ないt検定を行い比較検討した

【結果】1. 外来血液透析患者59名にアセスメントを行い、リスク0 31名、リスク1 20名、リスク2 5名、リスク3 0名、対象外3名に振り分け観察を行なった

2. アンケート集計結果

年代について有意差が見られたが、その他の項目には有意差は見られなかった。

【結論】1. アセスメントを行い、リスク別にしたことで患者のどこを重点的に観察するのが、経験に関係なくスタッフが分かるようになった。2. 前回と状態を比較し医師に速やかに異常を報告できるようになった。3. 観察を始めた頃は、手入れのしていない足を見ることも多かったが、5年後には、足の観察が習慣になったこともあり、足を洗ったり、保湿剤を使用したり、爪を切って清潔に保とうとする患者の姿が伺えるようになった。

4. 患者の高齢化が進み、自己管理が難しくなってきた。

【今後の課題】1. 現在透析中にベッド上でフットケアを行っているが、血圧の変動や処置による出血など危険性や感染などの観点からも、透析をしていない時間帯に観察ができる場所とスタッフの確保を行う必要があること

2. フットケアに伴う処置料が取れないこと

3. 自己管理が難しい患者のサポートをどのように行っていくかが課題となっている

P-228

心臓カテーテル検査室における患者満足の実態

徳島赤十字病院 看護科

とくなが
徳永なおみ、川島 輝枝、四宮 裕美、大西 智恵、堀 八千代、豊野みゆき

【はじめに】意識下での心臓カテーテル検査・治療（以下心カテとする）を受ける患者は同一体位を余儀なくされる上に、検査・治療に対する不安や恐怖などによる身体的、精神的苦痛が大きい。A病院心カテ室では、状況を判断しながら個別的援助を行っているが、患者からのフィードバックを得る機会が少ない。そこで、A病院顧客満足度調査をもとに独自で作成したアンケートを用い、心カテ中の患者満足の実態を明らかにするために本研究に取り組んだ。

【研究方法】心カテを受けた患者54名。病室にてアンケート用紙を配布し、病棟に設置した回収箱に投函してもらった。アンケートは、5つのカテゴリー（カテ室医療者の対応、プライバシーへの配慮、カテ室医療者の気配りと説明、行為の信頼性、環境）に分類、内容は24項目を作成し、5段階評価とした。

【分析方法】1. CS分析し、グラフ化した2. [順位和]を求め、取り組むべき項目に優先順位をつけた。

【結果】CSグラフでは、24項目中23項目が満足率重要度共に、重要維持項目に含まれていた。「体位の安楽さ」においては、要改善項目となった。取り組み課題の優先としては、「スタッフ間の声」「羞恥心への配慮」であった。今回CS分析し、満足率だけでなく重要度を表したことで、患者が心カテ中に重要視している項目を抽出することができた。

【結論】心カテを受ける患者は、5つのカテゴリーすべてを重要視していることがわかった。取り組むべき最優先項目は「スタッフの声」「羞恥心への配慮」であった。今後、これらの結果を医療者間で共有し、より良いチーム医療に繋げていくことが課題である。